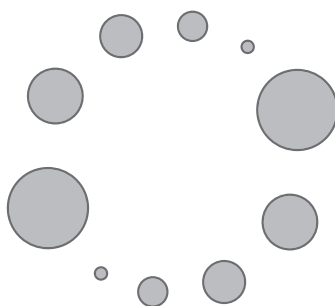


小中の接続を見通した「古典」授業

国語教育実践研究会 編



三省堂

新しい学習指導要領で「伝統的な言語文化に関する事項」が新設されました。その結果、小学校での「古典」の扱いが、従前に比べて飛躍的に充実しました。例えば、今まで中学校の国語教科書に採録されていた「古典」作品の多くは、小学校の教科書に採録され、学習対象となりました。

こうしたことを受け、中学校における「古典」指導の見直しが必要となってきました。そこで弊社では、「国語教育実践研究会」の先生方に、新しい学習指導要領の下での、中学校における「古典」の教材や学習指導の可能性をご検討いただきました。

本書はそこご研究、ご実践の一部をまとめていただいたものです。全国の多くの先生方のこれからの授業にお役立ていただければ幸いです。

目次

新しい授業づくりー古典教材と学習活動の構想	4
【参考】三年間の「古典」学習の流れ	6
新しい授業づくりの実践	8



一年

第一時 春のうた・朧月夜	10
第二時 和歌・俳句	11
第三時 枕草子・徒然草・平家物語	12
第四時 漢詩・漢文	13
第五時 竹取物語	14
第六時 竹取物語	15
第七時 竹取物語	16
第八時 竹取物語	17



二年

第一時 枕草子	18
第二時 徒然草	19
第三時 枕草子・徒然草	20
第四時 漢詩	21
第五時 漢詩	22
第六時 漢詩	23



三年

第一時 おくのほそ道	24
第二時 おくのほそ道	25
第三時 おくのほそ道	26
第四時 漢文	27
第五時 漢文	28
第六時 漢文	29
教材〈一年〉	30
教材〈二年〉	36
教材〈三年〉	40
テスト問題例Ⅰ〈一年〉	44
テスト問題例Ⅱ〈二年〉	46
小学校で扱う古典教材	48

新しい授業づくりー古典教材と学習活動の構想

Ⅰ 中学校における学びと「学習指導要領」の改訂

中学校に入学したての生徒たちに、何を目標にして、どんな教材（学習材）を与え、どんな学習活動を組織すればいいかは、等しく国語教師の悩むところである。このことは、二年・三年に進級したての生徒たちに対しても、程度の差こそあれ、同じである。一年生を例にとると、中学校での生活と学習に期待と不安をもつ生徒たちに、

- ・ 早く中学校の生活に慣れてもらいたい。
- ・ 早く中学校の国語の学習に慣れてもらいたい。
- と、教師は願う。そして、

- ・ 中学生になったという自覚を呼び覚まし、喜びを与えたい。
- ・ 中学校では、こんな学習をするのか・中学校での学習は、こうすればいいのかという安心感と自信を与え、希望をもって学習に参加してもらいたい。

と考え、それにふさわしい教材を探し、学習活動を組織する。一方、教師は、学習の出發にあたり、

- ・ 生徒たちの学力の実態を診断したい。
- ・ 生徒たちの個性を知りたい。
- ・ 生徒たちの学力の足並みをそろえたい。
- とも考える。

従来、国語の教科書では、学年の初めの教材として、現代詩や現代文の物語・小説・随筆などが採用されてきた。これらも、右記の教師の願いや考えを反映したものだ。

ところで、今般、中学校の「学習指導要領」が改訂され、そこでは「伝統的な言語文化の重視」が謳われた。具体的には、

〔第一学年〕

(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

〔第二学年〕

(ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。

(イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

〔第三学年〕

(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

(イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

などと示された。

これらは、次のような小学校の「学習指導要領」の改訂を受けたものである。

〔第三学年及び第四学年〕

(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用語、故事成語などの意味を知り、使うこと。

〔第五学年及び第六学年〕

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

II 新しい授業づくりに向けて

この小学校・中学校の「学習指導要領」の改訂を受けて、私たちの研究会では、これだけ小学校で古典教材の学習をするのなら、古典の和歌や俳句、古文や漢文を中学校の学年初めの教材として位置づけるのは可能ではないか、いや位置づけることに意味があるのではないかと考えた。それは、学年の初めにあたって、

- ・生徒たちの学力の実態を診断したい。
- ・生徒たちの個性を知りたい。

など前述したような教師の意図に適うばかりでなく、教材と学習指導の方法の工夫によって、生徒たちに、

- ・新学年になったという自覚を呼び覚ます。
 - ・新学年の学習に安心感と自信を与える。
- という願いも実現できるのではないかと考えたからである。

そこで、学年初めには、どんな教材がふさわしいか、どんな学習活動が適切かを、小学校・中学校の「学習指導要領」を参照しながら、これまでの中学校での古典指導の実践を踏まえて検討した。その結果、

- ・教材（作品の種類）としては、小学校でふれたことのあるような作品を含め、古典の和歌や俳句、随筆や物語、漢詩や漢文。
 - ・学習活動としては、音読・朗読を中心として古典のリズムや調べを味わい、情景や心情を想像する活動。
- などを主な内容として、学習を組織することとした。

III 新しい授業づくり——古典教材（作品）と学習活動の内容

以下では、中学校の「学習指導要領」を念頭に置きつつ、小学校での学習との連続性と中学校でこれまで扱ってきた教材（作品）と学習

活動とを考え合わせ、一年から三年までの各学年について教材（作品）を選定し、学習活動の重点を取り出した。

一年

「学習指導要領」の「古典には様々な種類の作品があることを知る」、「古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れる」を受けて、やさしい古典の和歌や俳句、短い随筆や物語、そして広く知られている漢詩や漢文などの教材を用意し（小学校で学習しているものを含むのが望ましい）、音読を通して古典の世界に触れる学習活動をする。

二年

「学習指導要領」の「ものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像する」、「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむ」を受けて、随筆「枕草子」と「徒然草」と漢詩「春望」や「絶句」を用意し、音読・朗読を通して古典の世界を楽しむながら、ものの見方や考え方、作者の思いなどに触れる学習活動をする。

三年

「学習指導要領」の「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむ」、「古典の一節を引用するなど」を受けて、俳文「おくのほそ道」と、私たちの生活の中に生きている「論語」など中国の古典の言葉を用意し、音読・朗読を通して古典の世界に親しみ、作品世界の歴史的背景や言葉の意味を私たちの日常生活の中で考える学習活動を行うとともに、引用して自分の考えを補強したり説得力をもたせたりする活動を行う。

参 考

私たちの研究会では、三年間の「古典」学習の流れを次の表のように考えています。
まだ試案段階ではありますが、参考として、お示しします。

小5・6

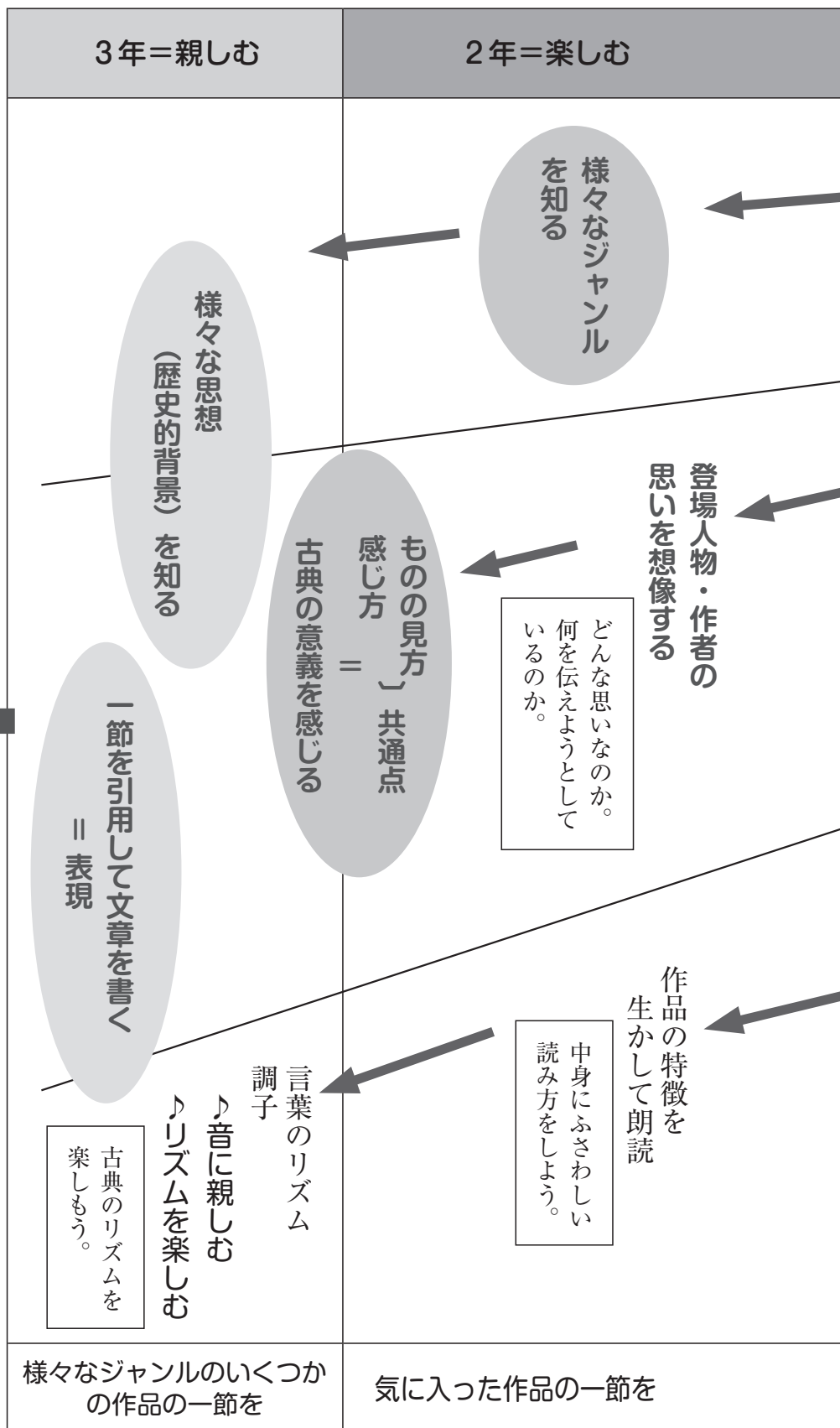
(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

◎「取り立て」学習と「領域関連」学習をバランスよく

1年=ふれる	学年
様々な作品を知る かなづかい 「だれが」「何をしたのか」の概略をつかむ 「できごとをつかむ」 どんなことがおこっているか。 音読して古典のリズムを味わう ♪八行転呼音 ♪あ・ゑ・づ・ぢ ♪連母音 すらすら読もう。 どんなふう to 読むのか…	「知識」 「内容の把握」 「声に出して読む」
気に入った部分を	暗唱



高校 国語総合
(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。 (イ) 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。



新しい授業づくりの実践

I 扱う教材

前記「新しい授業づくり―古典教材と学習活動の構想」にもとづき、各学年、以下の教材を用意した。

一年

〈詩〉

- ・春のうた（草野心平）
- ・朧月夜（高野辰之）

〈和歌〉―原文と現代語訳

- ・春過ぎて 夏来たるらし 白たへの 衣干したり 天の香具山（持統天皇）
- ・人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香ににほひける（紀 貫之）
- ・世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし（在原業平）

〈俳句〉―原文と現代語訳

- ・行く春や 鳥啼き魚の 目はなみだ（松尾芭蕉）
 - ・春の海 ひねもすのたり のたりかな（与謝蕪村）
 - ・めでたさも ちう位なり おらが春（小林一茶）
 - ・若鮎の 二手になりて 上りけり（正岡子規）
- 〈随筆〉―原文と現代語訳
- ・「春はあけぼの」（「枕草子」第一段）
 - ・「つれづれなるままに」（「徒然草」序段）

〈物語〉―原文と現代語訳

- ・「祇園精舎の鐘の声」（「平家物語」冒頭）
- 〈漢詩〉―書き下し文と現代語訳
- ・「春曉」（孟浩然）
- 〈漢文〉―書き下し文と現代語訳
- ・「吾、十有五にして学に志す」（「論語」為政）
- 〈物語〉―原文と現代語訳
- ・「竹取物語」（冒頭ほか）

二年

〈随筆〉―原文と現代語訳

- ・「うつくしきもの」（「枕草子」第百四十五段）
 - ・「五月ばかりなどに」（「枕草子」第二百七段）
 - ・「仁和寺にある法師」（「徒然草」第五十二段）
 - ・「ある人、弓射ることを習ふに」（「徒然草」第九十二段）
- 〈漢詩〉―書き下し文と訓読文
- ・「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（李白）
 - ・「春望」（杜甫）
 - ・「絶句」（杜甫）

三年

〈俳文と俳句〉―原文と現代語訳

- ・「月日は」（「おくのほそ道」冒頭）
- ・「平泉」（「おくのほそ道」平泉）
- 〈漢文〉―書き下し文と訓読文、詳しい訳
- ・「備へ有れば、患ひ無し。」（「書経」）

・「百聞は一見に如かず。」〔漢書〕

・「虎穴に入らずんば、虎子を得ず。」〔後漢書〕

・「寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれ。」〔十八史略〕

・「先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。」

〔史記〕

・子曰く、「学びて時にこれを習ふ、また説ばしからずや。朋遠方より来たるあり、また樂しからずや。……」

〔論語〕

Ⅱ 指導のポイント

一年

① 一年生の学年初めの教材としては、何よりもまず、リズムや調べに優れ、イメージを作りやすく、音読や暗唱に適する教材を選んだ。

また、小学校ですでに触れている作品、日常生活の中で目にし耳にすることの多い作品、生徒たちにぜひ知ってもらいたい作品という点も配慮した。

② 音読を重視するという立場から、また、生徒たちの学習への意欲づけを図るという考えから、韻文作品、それも生徒たちに親しみやすい現代詩、文語詩、和歌、俳句という順に配列し、学習の導入とした。一年生の学習の初めに、音読を中心とする学習、しかも一通り音読の練習をした後で自分の好きな作品を選んで音読発表をする学習を通して、生徒たちの声を出すことへの抵抗感を取り除くとともに、自己達成感を育み、個性の発揮を目ざした。

③ 音読を中心とする学習なので、作品のもつリズムに気づかせ、また読み方（文語の言葉遣い）に注意させたい。教師がゆっくり範読し、生徒たちに繰り返させる。そして、時間の許す限り、音読の練習をさせたい。

④ 内容の理解は、その場の様子や作者の思いの要点が捉えられればよいとし、細かな語釈や文法的な説明は最小限にしたい。

二年

① 二年生の学年初めの教材も、リズムや調べに優れ、イメージを作りやすく、音読・朗読に適した教材を選んだ。特に、リズムや調べ、イメージや文体の上で対比的な「枕草子」と「徒然草」とを並べることによって、音読を通して、それらの違いに気づくように工夫した。

② 漢詩は、七言絶句・五言律詩・五言絶句と形式の違う三つの詩を、書き下し文と訓読文とを並べた。これを音読することによって、それぞれの詩形のもつリズムや調べ、詩の構成法の違いなどに気づくように配慮した。

三年

① 三年生の学年初めの教材も、リズムや調べに優れ、三年生の教材として定評のある「おくのほそ道」の旅立ちの場面と平泉の場面とを並べた。この両場面を音読し、比べることによって、作者の人生観・歴史観が学び取れるように工夫した。

② 漢文は、日常生活の中で、生徒たちがよく目にし耳にする言葉を選んだ。リズムや調べが優れているので、音読を繰り返すことによって暗唱にまで高めたい。また、言葉の意味を、具体的な場面に即して考えるようにさせたい。

③ そのうえで、これらの漢文を引用し、文章を補強したり、説得力を高めたりする活動をさせたい。

1年 第一時

学習活動

1 学年初めとなる学習の全体の概要を知る。

2 「春のうた」(草野心平)と「朧月夜」(高野辰之)の教師の範読を、情景を思い浮かべながら聞く。

3 教師の指示に従って、二つの詩を全員が声をそろえて読む。

4 好きな詩を選んで、声に出して読む

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 ここで扱う全教材のプリントを配り、どんな授業をするかについて説明する。その際、生徒たちが教材について、どのくらい知識をもっているか、簡単に確かめておく。



プリントを見てみましょう。前半に、詩が二編、和歌が三首、俳句が四句、随筆が二編、それに物語と漢詩、漢文が一編ずつ——と、あえて呼び方を出し、反応を確かめる——入っています。後半には「竹取物語」が入っています。今日から、前半四時間、後半四時間、このプリントを使って学習します。声に出して読むことが学習の中心です。それぞれの作品について気がついたことを発表してもらったり、好きな作品を読んでもらったりする学習もあります。

では、今、配った作品の中で、知っているものはありますか。(詩、和歌、俳句、随筆、物語、漢詩、漢文のそれぞれについて「知っている」「習った」という声あり。)習ったことを思い出しながら学習しましょう。



2 生徒に情景を思い浮かべながら聞くように指示し、範読する。その後、二つの詩についての理解度を確かめる。

みなさんの中には、この二つの詩を「知っている」「習った」という人がいましたね。では、それぞれの詩にうたわれているのは何月の何時ごろでしょうね。どんな気持ちやどんな様子をうたっていますか。そのことがわかる言葉と一緒に言ってください。

3 「春のうた」は、まず「題名・作者名」を教師が読み、続いて生徒に読ませる。次に「前書き」「詞書」といつてもいいかもしれない)を教師が読み、続いて生徒に読ませる。それから「連」ごとに教師が読み、続いて生徒に読ませる。「朧月夜」は、まず「題名・作者」を教師が読み、続いて生徒に読ませる。それから一行ずつ教師が読み、続いて生徒に読ませるといいう形をくり返す。

4 好きな方の詩を選ばせて、三、四人の生徒に音読させる。その際、どういうことを表現したいかを話させる。

振り返り

気に入った詩を選んで、音読しようとしたか。

学習活動

①教師の和歌の範読を、情景や心情を想像しながら聞く。

②各自で、和歌の音読練習をする。

③好きな和歌を選んで音読する。

④教師の俳句の範読を、様子を想像しながら聞く。

⑤各自で俳句の音読練習をする。

⑥好きな俳句を選んで音読する。

⑦和歌と俳句の特徴について、気がついたことを発表する。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①教師は、それぞれの歌にうたわれている様子は気持ちを想像しながら聞くように促す。そして、意味の切れ目に注意して、ゆっくり二回ずつ読む。



今日は、和歌と俳句の学習をします。両方とも、「知っている」「習った」と言った人がいましたね。最初に和歌の学習をします。先生がゆっくり二回ずつ読みます。横の訳も見ながら、様子や歌った人の気持ちを想像しながら聞いてください。

②時間は五分程度。初めは意味の切れ目に注意し、小さな声（微音読）で歌のイメージを作るように。少し慣れたならば、はっきり声に出して読むように指示する。

③一首につき、二、三名の生徒に音読させる。初めに、選んだ歌の好きなところや歌われている様子などを話させる。

④教師は、それぞれの俳句に描かれている様子を想像しながら聞くように促す。そして、ゆっくり二回ずつ読む。

⑤時間は五分程度。和歌のときと同じように、初めは小さな声（微音読）で、イメージができたところで、はっきり声に出して読むように指示する。

⑥一句につき、二、三名の生徒に音読させる。初めに、好きなところや描かれている様子などを話させる。

⑦概念的に「切れ字」や「季語」「句切れ」「枕詞」などを説明するのではなく、生徒が和歌や俳句の学習の中で具体的に見つけたものに即して話したい。生徒から、「切れ字」などの言葉が出た場合も、教材として提出されているものに即して説明したい。



和歌と俳句では、どんなところに違いがありますか。どんなところに特徴がありますか。気がついたことを発表しましょう。



今日は、和歌と俳句について学習しました。今日、学習したのは古いものばかりですが、新聞の「投稿欄」を見てみるとよいでしょう。和歌と俳句は今でも盛んに作られ、自然や社会や生活の様子、人の気持ちなどを描いています。

振り返り

和歌と俳句をイメージをふくらませながら音読したり、両者の違いについて考えたりできたか。

1 年 第三時

学習活動

1 随筆「枕草子」と「徒然草」を、描かれていた様子や筆者の気持ちを考えながら、教師の範読を聞く。

2 教師の指示に従って、二つの随筆の原文の部分を全員で声をそろえて読む。

3 二つの随筆について、言葉の響きやリズム、またその内容について気づいたことや不思議に感じたことなど感想を自由に発表する。

4 「平家物語」の教師の範読を、リズムに気をつけながら聞く。

5 教師の指示に従って、「平家物語」の原文の部分を全員で声をそろえて読む。

6 随筆と物語について、気づいたことを発表する。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 古典のリズムや響きに注意しながら聞くように促し、一行ずつ、ゆっくり読む。



今日は、随筆と物語の学習をします。最初は随筆です。一行ずつ、ゆっくり読みますから、現代の私たちが使う言葉との違いを考えながら聞いてください。

2 一行ずつ、ゆっくり教師が読み、続いて生徒が読む形で進める。「枕草子」を読み終えたら、その現代語訳を読んで聞かせ、「徒然草」を読み終えたら、その現代語訳を読んで聞かせる。

3 お互いの発表を聞き合うことで、自分では気づかなかったものの見方や捉え方などに目をむけさせ、新しい発見をさせた。

4 随筆との言葉遣いや文章のリズムの違いに注意することを促し、一行ずつ、ゆっくり読む。

5 一行ずつ、ゆっくり教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。全文を読み終えたら、教師が一行ずつもう一度読みながら、意味の要点を説明する。

6 言葉遣いについても、文章の内容やリズムについても、自由に発表させる。

振り返り

それぞれの随筆の特徴、物語の特徴を生かして音読しようとしたか。

1 年
第四時

学習活動

① 漢詩と漢文とを、その独特なリズムや調子に注意しながら、教師の範読を聞き、意味の概要を知る。

② 教師の指示に従って、漢詩と漢文の「書き下し文」の部分全員で声をそろえて読む。

③ 各自で、漢詩と漢文の音読練習をする。

④ 好きな作品を選んで音読する。

⑤ これまで学習した詩や和歌、俳句、随筆、物語、漢詩、漢文の中から最も気に入ったものを選び、音読発表をする。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

① 一行ずつ、ゆっくり読む。漢詩を読んだ後に、一行ずつ意味の概要を説明し、漢文を読んだ後に、一行ずつその訳を読んでも聞かせる。



これから、漢詩と漢文の学習をします。これについても、「知っている」という人がいましたね。両方とも、もとは中国で作られたものですから、漢字だけで書かれたものです。それを、ここにあるように、仮名を交えて日本語の語順に従って書き直した文を、「書き下し文」といいます。ゆっくり、一行ずつ読みますから、どんな様子が描かれているか、どんなところに特徴があるかに気をつけて聞いてください。

② 一行ずつ、ゆっくり読む。漢文については、特に各行冒頭の数字（年齢）と漢字で示されたところに注意を促す。

③ それぞれ五分ずつ、合計十分の時間をとる。初めは小さな声（微音読）で内容を考えながら読むように、文のリズムに慣れたなら、少し声を出して読むように指示する。

④ それぞれ、二、三名の生徒に音読させる。その際、意味の切れ目に注意して読むよう指示する。

⑤ 初めに、自分の好きな作品を選び、練習する時間として五分ほど与える。それから、詩・和歌・俳句・随筆・物語・漢詩・漢文の順に好きな作品を選ばせていく。なるべく多くの作品を取り上げるようにしたい。



それでは、これから、今までに学習した詩や和歌、俳句、随筆、物語、漢詩、漢文の中から自分の好きなものを選んで音読する発表会をします。最初に、時間を五分ほどあげますから、自分の好きな作品を選んで、音読の練習をしてください。それから、時間の許す限り、多くの人に音読発表をしてもらいます。

振り返り

気に入った作品を選んで、音読することができたか。

学習活動	指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など
1 「古典」について、知っていることを確認し、「古典」にはさまざまな種類の作品があることを知る。 2 教師の教材文（「竹取物語」）の範読を聞き、教材の概要を知る。 3 教師が「竹取物語」の冒頭部の原文を範読し、語釈を加えながら現代語訳をするのを聞く。 4 教師の指示に従って、「竹取物語」の冒頭部の原文を、全員が声をそろえて読む。 5 「竹取物語」の冒頭部の原文を、各自で音読練習する。	1 教材に入る前に、小学校で既に学習してきている生徒たちが、「古典」についての程度の知識があるのかを確認する。（知っていることを発表させる）。また、「古典」にはさまざまな種類の作品があることを説明する。  「古典」と呼ばれる作品について、どんな作品を知っていますか。また、それはどんなお話ですか。いつ頃の作品でしょうか。  「古典」にはさまざまな種類の作品があることがわかりましたね。それでは、その中の一つである「竹取物語」を読んでみましょう。 2 現代文で書かれた教材についての解説やあらすじをナレーターのように範読し、その後で補足説明をする。（難しい言葉について説明する程度にとどめる）。原文の部分は、特にゆっくり読む。  このお話は既に知っているという人もいましたね。自分の知っているお話と同じかどうかに気をつけて、聞いてください。 3 原文を一行読み、続いて語釈を加えながら、その部分の現代語訳をするという形で進める。現代語訳は必要最低限にとどめ、極力、文法的な説明にならないよう配慮する。 4 一行ずつ、ゆっくり、まず教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。 5 意味の切れ目を考えながら、リズムよく読むように指示する。初めは小さな声（微音読）で、文のリズムに慣れさせ、すらすら（滑らかに）読めるようになったら暗唱に挑戦させる。 振り返り 自分の知っている話と同じかどうかに気をつけて聞こうとしたか。

学習活動

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①「竹取物語」冒頭部（今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。……）について、教師の範読を聞く。

②教師が一文ずつ範読し、続いて全員が声をそろえて音読する。

③自分一人で音読する。続いて、二人一組になって音読する。最後に、暗唱する。

④この物語の登場人物について、想像する。

⑤原文を読み、主人公がどこで生まれたかを確認する。

⑥原文を読み、主人公がどのような様子で生まれてきたかを確認する。

①「竹取物語」冒頭部を教師がリズムよく、滑らかに範読する。

②意味の切れ目に注意して、教師が一文ずつ、ゆっくり読み、続けて生徒にゆっくり音読させる。

③生徒一人一人が音読し、古典特有のリズムを味わう時間をとる。リズムに慣れてきたら、二人一組をつくり、一緒に音読させる。最後に、暗唱に挑戦させる。

④冒頭部に出てくる登場人物について、どのようなことが書かれているかを答えさせる。



今、読んでもらったところには、どんな人物が出てきますか。何をしている人ですか。その人が何をしているときに、どんなことに出会いますか。

⑤主人公が生まれた場所について、答えさせる。

⑥主人公の生まれてきた様子について、答えさせる。（「三寸ばかりなる人」「いとうつくしうてゐたり」など）

振り返り

音読することに慣れ、登場人物についてイメージを作ることができたか。

1年 第七時

学習活動	指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など
1 「竹取物語」 中間部（天人の中に、持たせる箱あり。……と言ひて、文書く。」について、教師の範読を聞く。 2 教師が一文ずつ範読し、続いて全員が声をそろえて音読する。 3 自分一人で音読する。続いて、二人一組になって音読する。最後に、暗唱する。 4 「かぐや姫」が求婚に応じない理由について考える。 5 「かぐや姫」を迎えに来た天人たちは、地上のことをどう思っているか。考えたことを発表し合う。 6 「かぐや姫」の気持ちを考え、その内容を発表し合う。	1 「竹取物語」 中間部を教師がリズムよく、滑らかに範読する。 2 意味の切れ目に注意して、教師が一文ずつ、ゆっくり読み、続けて生徒にゆっくり音読させる。 3 生徒一人一人が音読し、古典特有のリズムを味わう時間をとる。リズムに慣れてきたら、二人一組をつくり、一緒に音読させる。最後に、暗唱に挑戦させる。 4 生徒に考えたことを発表させ合う。  「かぐや姫」は、どうして五人の貴公子や帝からの求婚に応じようとしないのでしょうか。 5 迎えに来た天人たちの地上への思いについて、「かぐや姫」への言動を手がかりに考えさせる。  天人のうちの一人が、壺に入っている葉を「かぐや姫」に飲ませようとしたのはどうしてだと思いますか。考えたことを発表してください。 6 月への迎えが来た「かぐや姫」の思いについて、考えたことを発表させる。  天人が天の羽衣を着せようとしたときに、かぐや姫が「しばし待て。」と言ったのはどうしてだと思いますか。 振り返り 音読することに慣れ、書かれている内容について想像をふくらませることができたか。

学習活動

①「竹取物語」昇天部（中将取りつれば……血の涙を流して惑へど、かひなし。」について、教師の範読を聞く。

②教師が一文ずつ範読し、続いて全員が声をそろえて音読する。

③自分一人で音読する。続いて、二人一組になって音読する。

④「かぐや姫」と「翁・嫗」の思いの差について考え、発表し合う。

⑤自分なりの物語の別展開について考えてみる。

⑥これまでに学習した「竹取物語」の原文の中で、一番気に入ったところを選んで音読発表をする。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①「竹取物語」中間部を教師がリズムよく、滑らかに範読する。

②意味の切れ目に注意して、教師が一文ずつ、ゆっくり読み、続けて生徒にゆっくり音読させる。

③生徒一人一人が音読し、古典特有のリズムを味わう時間をとる。リズムに慣れてきたら、二人一組をつくり、一緒に音読させる。

④まず、「かぐや姫」の思いについて、考えたことを自由に生徒に発表させる。次に、「翁・嫗」の思いについて、考えたことを発表させ、その上で両者の思いを比べながら考えさせる。

⑤「もし…」と仮定した別の展開を与え、その場合の話の続きを想像させ、自由に発表させる。

もし、天人が天の羽衣を「かぐや姫」に着せなければ、「かぐや姫」はどうしたと思いますか。自ら天の羽衣を着たでしょうか。それとも、おじいさんとおばあさんのもとへ残ったでしょうか。考えたことを自由に発表してください。

⑥初めに、好きなところを選び、音読練習する時間を五分ほど与える。それから、音読の発表をさせる。

これから「竹取物語」の音読発表会をします。これまでに学んだ原文の中から読んでみたいと思うまとまりを選んで練習してください。これまでの学習で、原文をいくつかに分けて読んだことを思い出してください。分けて読んだところがひとまとまりです。

振り返り

教材の内容を理解し、好きなところを選んで音読を発表しようとしたか。

2年 第一時

学習活動

1 これから始まる学習の全体の概要を知る。

2 様子を思い浮かべながら、「枕草子」の第百四十五段と第二百七段の、教師の範読を聞く。

3 教師の後について、第百四十五段と第二百七段を音読する。

4 それぞれの段で、筆者は、どういうところに「うつくし（かわいらしい）」「をかし（おもしろい）」を発見しているか。各自の読み取ったものを発表する。

5 好きな段を選んで、音読の練習をする。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 これから扱う全教材のプリントを配り、どんな授業をするかについて説明する。その際、生徒たちが教材について、どのくらい知識をもっているか、簡単に確かめておく。



プリントを見てみましょう。前半には随筆「枕草子」と「徒然草」が、後半には「漢詩」があります。漢詩は李白のもの一編と杜甫のもの二編です。今日から、前半三時間、後半三時間このプリントを使って学習します。この中に知っている作品はありますか。

声に出して読むことが学習の中心ですが、随筆では筆者のものの見方・感じ方を、漢詩では情景や作者の思い——と、あえて筆者・作者と使い分け、生徒の反応を見る——にも目を向けてみようと思います。では、授業を始めます。

2 句点はしっかり間を置き、読点は言葉のつながりに気をつけて、間の置き方に長短をつけて——あまり極端にしない。基本は、しっかり間を置く。——、ゆっくり読む。



これから、「枕草子」の第百四十五段と第二百七段をゆっくり読みます。言葉のつながりに気をつけて、横に書かれた訳にも注意し、どんな様子が描かれているかを考えながら聞きましょう。

3 1と同じように、言葉のつながりに気をつけて、短い間の読点のところはつなげて、ゆっくり読む。教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。

4 第百四十五段では、「瓜に描いてある幼児の顔」「すずめの子が、ねずみの鳴きまねをする」と躍るようにして来る姿」「二歳か三歳の幼児が、小さなごみを見つけて見せている様子」「髪をおかっぱにした幼児の様子」などの四つが、生徒のイメージを伴って出てくればよい。第二百七段では、「五月頃に山里に出かけたとき、草が生い茂ったところを行くと、下に深くはないけれど水があって、歩くにつれて飛び散る様子」が、生徒のイメージを伴って出てくればよい。



第百四十五段で「うつくし」といっているのは、どんなことですか。第二百七段で「をかし」といっているのは、どんなことですか。横の訳文を参考にし、自分の想像したことも加えて発表してください。

振り返り

5 初めは小さな声（微音読）で、言葉のつながりがわかったところで、はっきり声に出して読むように指示する。文章に即して、書かれている内容をしっかり捉え、自分の言葉で表現しようとしたか。

学習活動

①筆者の「人の見方」に注意して、「徒然草」の第五十二段と第九十二段の、教師の範読を聞く。

②教師の後について、第五十二段と第九十二段を音読する。

③それぞれの段で、筆者は人間をどう見ているか。各自の読み取ったものを発表する。

④好きな段を選んで、音読の練習をする。

⑤好きな段を選んで、音読発表をする。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①句点はしっかり間を置き、読点は言葉のつながりに気をつけて、間の置き方に長短をつけて——あまり極端にしない。基

本は、しっかり間を置く。——ゆっくり読む。



これから、「徒然草」の第五十二段と第九十二段をゆっくり読みます。言葉のつながりに気をつけて、横に書かれた訳にも注意し、筆者がお坊さんや人間をどう見ているかを考えながら聞きましょう。

②①と同じように、言葉のつながりに気をつけて、短い間の読点のところはつなげて、教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。ゆっくり読むということに気を配りたい。

③第五十二段では、筆者は、仁和寺にいる僧がどう思っているのか、石清水八幡宮にお参りに行き、お参りせずに帰ったことについて、その行為と語った内容に即して捉えられればよい。第九十二段では、師とは「すごいものだ」と捉えるか、人間とは「自分でも気づかずに怠け心をもつものだ」と捉えるか。こちらも、師の言った言葉とその解説の概要を捉えることができる。



第五十二段には、あるお坊さんが石清水八幡宮にお参りに行ったときのことと、帰って、そのときのことを人に話したことが書かれています。また、第九十二段には、弓の先生の言ったことと、その解説とが書かれています。それぞれ、どんなことが書かれているか、筆者が思ったこと、考えたことを発表してください。

④時間は五分程度。初めは小さな声（微音読）で、言葉のつながりがわかったところで、はっきり声に出して読むように指示する。

⑤時間の許す限り、できるだけ多くの生徒に読ませたい。

振り返り

文章に即して、書かれている内容を捉え、自分の言葉で表現しようとしたか。

2年 第三時

学習活動	指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など
1 話の内容に注意しながら、「枕草子」と「徒然草」の四つの話の教師の範読を聞く。 2 教師の後について、「枕草子」と「徒然草」の音読をする。 3 「枕草子」と「徒然草」の四つから、気に入った話を一つ選んで、筆者のものの見方や考え方について自分が考えたことを書く。 4 書いたことを四人一組になって、発表し合う。	1 句読点のところはしっかり間を置き、ゆっくり読む。 2 まず教師がゆっくり読み、続いて生徒が読むという形で進める。 3 四つの話の中から、共感できる点、似たような経験や事柄などを、自由に短い文章にまとめさせる。生徒が、自分たちの感覚や考え方と比べながら文章を書くことによって、古典の世界を身近に感じさせることがねらいである。  今読んだ四つの話から一つ選んで、自分の考えを体験を交えて書いてみましょう。 「枕草子」を選んだ場合には、「かわいいな、きれいだなと思ったことやもの」、「徒然草」の場合には「部活動での体験」「旅行での失敗」などを思い出して筆者が言っていることと比べてみよう。 4 四人一組になって、お互いにまとめたことを聞き合い、共感できるところや、自分の考えと違うところに気づかせるなど、交流の時間とする。 振り返り 筆者のものの見方や考え方を、自分たちとの対比の中でとらえることができたか。

2 年
第四時

学習活動

①言葉の切れ続きに注意して、教師の三編の漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春望」「絶句」の音読を聞く。

②リズムに注意して、三編の漢詩を教師の範読に続いて読む。

③参考として掲げられた「訓読文」について、教師の説明を聞き、漢詩・漢文の形式を知る。

④三編の漢詩を、各自で音読練習をする。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①三編の漢詩のそれぞれを、生徒には文字をしつかり目で追うように指示し、文節に区切って読むような読み方で、ゆっくり読む。



今日から漢詩の学習をします。この学習は声に出して読むことが中心です。声に出して読むことで、漢詩のリズムを味わい、また詩に描かれた情景や詩に込められた作者の思いを捉えたいと思います。初めに、先生がゆっくり読みます。言葉の切れるところ、つながるところに注意して、聞いてください。

②一句ずつ、ゆっくり、教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。

③漢詩・漢文を日本語の語順に従って読むために日本人が工夫した「レ点」や「一・二点」、「送り仮名」などについて、教材の理解に必要な範囲で説明する。また、その他、気づいたことについて質問し、最初の詩が七言絶句であること、二つ目が五言律詩であること、三つ目が五言絶句であることから、絶句と律詩には、五言と七言があることを説明する。



今、みなさんに読んでもらったのを「書き下し文」といいます。左に掲げてあるのが、もとの中国語の詩に、日本語で読めるように、日本人が工夫したものです。もとの中国語で書かれたものを「白文」、それに日本人が工夫したものを「訓読文」といいます。「訓読文」には、「二・一」という点や「レ」という点が付いていますね。これを「返り点」といい、「二」の下から「一」までを先に読む、「レ」の下の一文字を先に読むという印です。また「送り仮名」も付いていますね。こんな工夫をして、日本人は中国語を読み、中国の文化を取り入れてきたのです。

④初めは小さな声（微音読）で、リズムに慣れてきたら、はっきり音に出して読むように指示する。時間の許す限り、練習する。

振り返り

返り点に注意して、音読することができたか。

2年 第五時

学習活動	指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など
1 教師の漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の範読を聞く。 2 教師の指示に従って、声に出して読む。 3 この作品の内容の大体をとらえる。 4 作者の心情について、気がついたことを発表する。 5 「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を、全員が声をそろえて音読する。	1 範読はゆっくりと読む。 2 繰り返し声に出して読むことで、リズムを味わわせる。 3 脚注なども参考にしながら、漢詩にうたわれている内容の大体を理解する。  この作品では、作者はどこにいて、何をしているのでしょうか。 4 作者の向き合う風景や光景、作者の心情などをとらえ、発表させる。また、この詩の背景として、李白と孟浩然の関係についても思いをめぐらせたり、生徒自身の経験と結びつけて考えたりできるとよい。  作者は、どのような気持ちでいるのでしょうか。気がついたことを発表してください。  作者の李白と、孟浩然はどのような関係でしょうか。今まで、似たような経験をしたことがある人は、そのときの自分の気持ちを思い出しながら、作者の気持ちを想像してみてください。 5 様子を思い浮かべながら、リズムに気をつけて、ゆっくり読むように指示する。できれば暗唱できるようにしたい。 振り返り 漢詩に興味をもち、様子を思い浮かべ、リズムに気をつけて読もうとしたか。

学習活動

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

①教師の漢詩「春望」の範読を聞き、また、この詩の内容や背景について、気づいたことを発表する。

②教師の漢詩「絶句」の音読を聞き、また、この詩の内容や背景について、気づいたことを発表する。

③「春望」と「絶句」とを、教師の指示に従って全員で声をそろえて読む。

④好きな漢詩を選んで、音読発表をする。

①範読はゆっくり、しかも、できれば三句と四句、五句と六句が対になっていることがわかるように読みたい。その後の詩にうたわれているのは、どんな春の様子なのか、どんな作者の思いをうたったものなのかを考えさせる。



これから「春望」を読みます。どんな内容が書かれているかに注意して聞いてください。作者は今、どんな立場でどんなことを思っているのか考えてみましょう。

②範読はゆっくり、しかし、絶句の特徴がわかるように三句目はリズムを変えて読む。その後、生徒のイメージを広げるように、また、詩に表れた作者の心情が深められるように、この詩から感じられることを発表させる。注記に敷衍して、一句と二句とにある「江」と「山」、「碧」と「青」、「鳥」と「花」、「白」と「然（赤）」の対比について気づかせ、このときの作者の置かれた状況について考えさせる。



これから「絶句」を読みます。対比されている色や物に注意して聞いてください。注を参考にして作者の置かれた状況や心情を考えてみましょう。

③リズムに気をつけて、ゆっくり読むように指示する。できれば、暗唱できるようにしたい。

④時間の許す限り、できるだけ多くの生徒に音読させる。聞いている人に、詩にうたわれているのは、どんな様子なのか、作者のどんな気持ちをうたったかが伝わるように意識させたい。

振り返り

好きな漢詩を選んで、その特徴を聞いている人に伝わるように工夫して読もうとしたか。

3年 第一時

学習活動

1 これから始まる学習の全体の概要を知る。

2 情景を思い浮かべながら、「おくのほそ道」の冒頭「月日は」の教師の範読と説明を聞く。

3 芭蕉について、「おくのほそ道」について、また、この「月日は」の場面について、知っていることや気がついたことを発表し、教師の補足説明を聞く。

4 「月日は」の場面を、教師の後に続いて音読する。

5 「月日は」の場面を、各自で音読練習する。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 これから扱う全教材のプリントを配り、どんな授業をするかについて説明する。その際、生徒たちが教材について、どのくらい知識をもっているか、確かめておく。



プリントを見てみましょう。前半に「おくのほそ道」の中から、冒頭の、「月日は」の場面と、有名な「平泉」の場面が、後半に「中国の古典の言葉」があります。このプリントの中で、知っている作品はありますか。今日から、前半三時間、後半三時間、このプリントを使って学習します。声に出して読むことが学習の中心ですが、その中で、「おくのほそ道」では作者は何を見て、何を感じ・考えたか、「中国の古典の言葉」では自分はその言葉をどう受け取ったか、その言葉から何を考えたかについても、学習しようと思います。

2 本文横にある訳も参考に聞き、どんな情景か、想像するように促す。句読点のところは、しっかり間を置き、ゆっくり読む。その後、固有名詞と特に難しいと思われる事項について説明する。

3 生徒に発表させた後、教師が補足説明する。芭蕉については、「おくのほそ道」を理解するのに必要な限りとする。「おくのほそ道」については、紀行文と俳句とから成り、「月日は」の場面については、旅についての芭蕉の考え、旅立ちに向けての芭蕉の気持ちを発表させ、補足する。俳句については深入りしない（俳句は第三時に扱う）。



旅に出る前、芭蕉はどんな気持ちでいることがわかりますか。行動も参考に考えてみましょう。

4 原則として、一文ずつ、まず教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。ただし、「予もいずれの年よりか」で始まる文は、「やや年も暮れ」の後と「白河の関越えむと」の後で切り、「もも引きの破れをつづり」で始まる文は、「三里に貧据ゆるより」の後と俳句の前で切るなどの工夫をする。

5 初めは小さな声（微音読）で、リズムに慣れてきたら、はっきり声に出して読むように指示する。

振り返り

文章の特徴・リズムに気をつけて、音読しようとしたか。

学習活動

1 情景を思い浮かべながら、「おくのほそ道」の「平泉」の場面の教師の範読を聞く。

2 「平泉」の場面について、知っていることや気づいたことを発表し、教師の補足説明を聞く。

3 「平泉」の場面を、教師の後にについて音読する。

4 「平泉」の場面について、わかったこと・気がついたことを発表し、教師の補足説明を聞く。

5 「平泉」の場面を、二人一組で練習し、気に入った部分を暗唱する。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 前半と後半では別のことが書かれていること、それぞれ、どんなことが書かれているかに注意して聞くように促し、句読点のところは、しっかりと間を置き、ゆっくり読む。前半部では、「さても義臣すぐつて」の前でやや長い間を置く。

2 平泉について、藤原三代について、義経について、「春望」について、知っているという生徒がいれば、発表させ、教材の理解にとって不足があれば、説明する。と同時に、高館を中心とする平泉の地図を掲げて、大門・秀衡の館の跡・金鶏山・衣川・和泉ヶ城・衣ヶ関、そして経堂・光堂などの位置関係を原文とからめて理解させる。

3 原則として、一文ずつ、まず教師が読み、続いて生徒が読むという形で進める。ただし、「七宝散りうせて玉の扉風に破れ」で始まる文は「すでに頽廃空虚の草むらとなるべきを」の後で一度切るとよい。

4 前半と後半に分けて、それぞれで、芭蕉は何を、どのように見たか、そこから何を感じ・考えたかについて、わかったこと・気がついたことを発表させる。そして、不足があれば、教師が補足して説明する。その際、生徒が理解できていなかった語句、難しい語句の説明も加える。俳句については深入りしない（俳句は第三時に扱う）。



前半では、高館に登ったと書いてありますね。そこで芭蕉は何を、見たのでしょうか。そして、何を感じ・考えたのでしょうか。



後半では、経堂と光堂を見たと書いてあります。特に光堂では、何を見て、何を感じ・考えたのでしょうか。

振り返り

5 初めは小さな声（微音読）で、リズムに慣れてきたら、はっきり声に出して読むように指示する。
文章の特徴・リズムに気をつけて、音読しようとしたか。

3 年 第三時

学習活動	指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など
1 「おくのほそ道」から好きな場面を選んで音読・朗読の発表をする。聞いている人は、発表者のよかったところを指摘する。 2 「平泉」に出ている三つの俳句にこめられた芭蕉の思いを想像する。気づいたこと、考えたことを発表し合う。 3 俳句を音読・朗読して、鑑賞する。	1 「平泉」は、前半と後半の二つに分ける。できれば全員に読ませたいが、学級の実態によっては、それぞれ、三、四名（全体で十名ほど）の生徒に読ませる。 これから「おくのほそ道」の音読・朗読発表会をします。できるだけ、聞いている人に、その場の様子や作者の気持ちや伝わるように意識して読みましょう。聞いている人は、音読・朗読が終わったところで、発表者によかったと思うところを教えてあげましょう。「平泉」の場面は、前半と後半の二つに分けます。では、音読・朗読したいところを選んでください。  これから「おくのほそ道」の音読・朗読発表会をします。できるだけ、聞いている人に、その場の様子や作者の気持ちや伝わるように意識して読みましょう。聞いている人は、音読・朗読が終わったところで、発表者によかったと思うところを教えてあげましょう。「平泉」の場面は、前半と後半の二つに分けます。では、音読・朗読したいところを選んでください。 2 それぞれの俳句の中に使われている言葉を、前に書かれている散文と関連づけながら、内容をとらえさせる。時代や人物背景について教師が補うとよい。一番気に入った句を挙げさせ、感じたことや考えたことを発表させる。 「おくのほそ道」にある俳句からいちばん気に入った一つを選んで、どんなところが気に入ったのか、感じたことや考えたことを発表しましょう。  「おくのほそ道」にある俳句からいちばん気に入った一つを選んで、どんなところが気に入ったのか、感じたことや考えたことを発表しましょう。 3 「切れ字」に気をつけ、それぞれの句のもつリズムに注意して音読するように促す。 振り返り 表現された言葉を結びつけて、俳句を理解しようとしたか。

学習活動

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 漢文「中国の古典の言葉」を、教師の後について一文ずつ音読する。

2 訓読文に注目しながら、教師の範読を聞き、意味を正確にとらえる。

3 好きな言葉を選んで音読し、その後、その言葉をどこで、どんなときに知ったかを発表する。

4 各自で、言葉の意味を考えながら音読練習をする。

1 句読点でしつかり間を置き、ゆっくり読む。

2 横の訓読文に注目して聞くように指示し、ゆっくり読む。

それでは、これから、先生がもう一度、それぞれの言葉をゆっくり読んでいきます。みなさんは、横の訓読文を見ながら聞いていてください。そして、それぞれの言葉の意味をつかみましょう。返り点などについては、以前の学習を振り返りながら確認しましょう。

3 日常の生活の中に生きている言葉ばかりである。どこで・どんなときに知ったかを発表させ、聞いている生徒にも、具体的な場面と言葉との結びつきをイメージさせたい。

これらの言葉は日常生活の中でよく使われますね。授業の初めに、この「中国の古典の言葉」について、知っていると言っていた人もいましたね。みなさんはどの言葉を知っていますか。どこで、どんなときに知ったかを発表してください。

4 初めは小さな声（微音読）で、リズムに慣れてきたら、はっきり声に出して読むように指示する。

振り返り

学習したことを思い出し、それを活用して新しい学習に取り組みうとしたか。

3 年 第五時

学習活動

1 漢文「中国の古典の言葉」の教師の範読を聞く。続けて、教師の後に続いて一文ずつ音読する。

2 「中国の古典の言葉」から、「百聞は一見に如かず」を引用した例文と、引用せずに状況を説明した例文を読み、その違いについて、気づいたことを発表する。

3 「中国の古典の言葉」から、好きな言葉の一つを選び、その言葉を引用した例文を書く。

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 リズムや漢文独特の言い回しに注意しながら、ゆっくり読む。

2 「百聞は一見に如かず」を引用した文章とそうでない文章を比べさせることによって、引用の効果に気づかせ、引用することへの意欲づけをする。



自分の考えがうまくまとまらないときや言葉ににくいときに、他の人の言葉を例に使う（引用すること）で、自分の考えをまとめるきっかけとなったり、よりわかりやすい表現ができることがありますね。例えば次の文章を比べてください。どうですか、どんなことに気づきましたか。

3 なかなか書けない生徒には、古典の言葉の現代語訳の部分をまず読ませ、その意味を確かめさせる。それらの内容と似たような経験をあげさせ、引用する言葉を見つけるよう促す。文章は、三百字程度書けるとよい。



「中国の古典の言葉」を引用し、それに関連した自分の体験を挙げて文章を書きましょう。

振り返り

引用の効果について考え、自分の表現に生かそうとしたか。

学習活動

指導の内容・教師の発問・指導上の留意点・評価など

1 前時に書いた漢文「中国の古典の言葉」の一節を引用した文章を音読し、発表する練習をする。

2 引用して書いた文章を発表し合い、気づいたことや考えたことなど、意見を交流する。

3 学習を振り返り、「中国の古典の言葉」について、自分たちの生活とのかかわりで気づいたことを発表する。

1 各自で、前時に書いた文章を小さな声で音読練習させる。

2 書いた文章を発表し合うことで、さまざまな表現の仕方に気づかせる。



今から、みなさんが書いた文章を一人ずつ、みんなの前で読んでもらいます。しっかりと聞いて、そのあと感じたことや気づいたこと、感心したことを発表しましょう。

3 古典と自分たちの生活とのかかわりについて考えさせたい。「中国の古典の言葉」を例に、それが私たちの生活の中、どのような形で生きているか、など。



「中国の古典の言葉」と私たちの生活と比べてみましょう。気づいたことや考えたことをノートにまとめてみましょう。（発表しましょう。）

振り返り

古典を通して、古人のものの見方・考え方が、私たちの生活にどのように生きているかを考えることができたか。

春のうた

草野心平くさの しんぺい

かえるは冬のあいだは土の中にいて春になると地上に出てきます。
そのはじめての日のうた。

ほっ まぶしいな。
ほっ うれしいな。

みずは つるつる。

かぜは そよそよ。

ケルルン クック。

ああいにおいだ。

ケルルン クック。

ほっ いぬのふぐりがさいている。
ほっ おおきなくもがうごいてくる。

ケルルン クック。
ケルルン クック。

出典『げんげと蛙』

朧月夜おぼろつきよ

高野辰之たかの たつゆき

菜の花畠ばたけに 入日薄いりひうすれ、
見わたす山の端は 霞かすみふかし。
春風そよふく 空を見れば、
夕月ゆづきかかりて におい淡あわし。

里ほわの火影かげも、森の色も、
田中こみちの小路を たどる人も、
蛙かわずのなくねも、かねの音おとも、
さながら霞かすみめる 朧月夜。

出典『日本唱歌集』

和歌

春過ぎて夏来たるらし 白たへの衣干したり 天の香具山
こゝろ あめ かぐやま
 春が過ぎて夏が来たらしい。真っ白な衣を干しているよ、天の香具山に。

持統天皇
じとうてんのう

出典『新編日本古典文学全集6 萬葉集①』

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける
か
 人の心(の中)は、さあ、どうなのかわからない。(でも) 古くからなじんだこの地では、(梅の) 花が昔のままの香りで咲いていることよ。

紀貫之
きのつらゆき

出典『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
 この世の中に桜が全くなかったならば、(花が散っていくのを惜しみ悲しむこともなく、世の中の人の) 春の心はのどかでいられるのに。

在原業平
ありはらのなりひら

出典『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』

俳句

行く春や鳥啼き魚の目はなみだ
ゆ な うを
 行く春を惜しんで、鳥は悲しげに鳴き、魚の目は涙にうるんでいる。

松尾芭蕉
まつお ばしう

出典『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』

春の海ひねもすのたりのたりかな
 (のどかな) 春の海は一日中、のたりのたりと寄せては返していることだ。

与謝蕪村
よさ ぶそん

出典『日本古典文学全集42 近世俳句俳文集』

めでたさもちう位なりおらが春
 特に立派なこともなく、まあまあめでたい、あるがままの私の新春だ。

小林一茶
こば いっさ

出典『鑑賞日本古典文学 第32巻 蕪村・一茶』

若鮎の 二手になりて 上りけり
わかあゆ ふたて
 若くて勢いのよい鮎の群れが、流れの分かれめで二手になって、それぞれ川を遡っていく。

正岡子規
まさおか しき

出典『日本の詩歌3 正岡子規 伊藤左千夫

長塚節 高浜虚子 河東碧梧桐』

春はあけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、

少しあかりて、

紫だちたる雲の 細くたなびきたる。

春は明け方（がよい）。

しだいに白くなっていく山に接したあたりの空が、
少し光を増して、

紫がかった雲が細くたなびいている（のは趣がある）。

（清少納言『枕草子』より）

出典『新編日本古典文学全集18 枕草子』

つれづれなるままに、

日暮らし 硯すずりに向かひて、

心にうつりゆく よしなしごとを、

そこはかたなく書きつくれば、

あやうこそ ものぐるほしけれ。

なすこともないままに、

一日中、硯に向かつて、

心に浮かんで消えていくたわいもないことを、

とりとめもなく書きつけていると、

あきれるほど気分が高ぶってくるのであるよ。

（兼好法師『徒然草』より）

出典『新編日本古典文学全集44 方丈記』

徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄

物語

祇園精舎の鐘かねの聲こゑ、諸行無常しよぎやうむじやうの響ひびきあり。

娑羅双樹しやらさうじゆの花の色いろ、盛者必衰じやうしやひつすいのことわりをあらはす。

おごれる人も久しからず、ただ春の夜よの夢のごとし。

たけき者もつひには滅ほろびぬ、ひとへに風の前の塵ちりに同じ。

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。

婆羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。

おごりたかぶっている人も長くは続かない、まるで（短くはかない）春の夜の夢のようである。

勢いの盛んな者もついには滅びてしまう、全く（たちまちに吹き飛ばされてしまう）風の前の塵と同じである。

（『平家物語』より）

出典 『新編日本古典文学全集45 平家物語①』

漢詩

春暁

孟浩然

春眠 暁を覚えず

处处 啼鳥を聞く

夜来風雨の声

花落つること知る多少

春の心地よい眠りに 夜が明けるのも気がつかなかった
外のあちらこちから 鳥のさえずりが聞こえてきた
昨夜は風と雨の音が だいぶ激しかったが
花はどれほど散ったことだろう

出典 『新書漢文大系6 唐詩選（新版）』

漢文

吾、十有五にして学に志す。

三十にして立つ。

四十にして惑はず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳順ふ。

七十にして心の欲するところに従ひて、矩をこえず。

私は、十五歳で学問をしようと決意した。
三十歳で、学問の基礎を確立した。
四十歳で、自信を得て迷わなくなった。
五十歳で、天から与えられた自分の使命を知った。
六十歳で、他の意見を素直に聞き入れられるようになった。
七十歳で、自分のしたいとおりに行動しても、人の道ははずれないようになった。

出典 『新釈漢文大系 第1巻 論語』
（『論語』より）

竹取物語

今は昔、竹取の翁おきなといふ者ありけり。

野山にまじりて竹を取りつつ、

よろづのことに使ひけり。

名をば、さぬきの造みやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

それを見れば、三寸ばかりなる人、

いとうつくしうてゐたり。

今となつては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

野山に分け入って竹を取っては、
いろいろなことに使っていた。

名は、さぬきの造といった。

その竹の中に、根もとの光る竹が一本あった。

不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。
その筒の中を見ると、三寸ほどの大きさである人が、
たいそうかわいらしい様子で座っている。



天人の中に、持たせたる箱あり。

天あまの羽衣はごろも入れり。

またあるは、不死の薬入れり。

一人の天人言ふ、

「壺つぼなる御薬みくすりたてまつれ。

きたなき所の物きこしめしたれば、

御心地おんこち悪しからむものぞ。」

とて、持もて寄りたれば、

いささかなめたまひて、少し、形見とて、

脱ぬぎ置きく衣ぬいに包まむとすれば、

ある天人包ませず。

御衣^{みぞ}を取りいでて着せむとす。

そのときに、かぐや姫、

「しばし待て。」と言ふ。

「衣、着せつる人は、

心異^{こい}になるなりといふ。

ものひと言、言ひ置くべきことありけり。」

と言ひて、文書^{ふみ}く。

天人の中（の一人）に、持たせた箱がある。

（それには）天の羽衣が入っている。

また別の箱には、不死の薬が入っている。

一人の天人が言う、

「壺に入っているお薬をお飲みください。

きたない地上のものを召しあがってきたので、

ご気分が悪いことでしょう。」

と言って、（薬を）持ってそばに寄ってきたので、

（かぐや姫は）僅かにおなめになって、少し、形見として、

脱いでおく着物に包もうとすると、

（そこに）いる天人が包ませない。

天の羽衣を取り出して、（かぐや姫に）着せようとする。

そのときに、かぐや姫は、

「しばらく待ちなさい。」と言う。

「天の羽衣を着せてしまった人は、

心が（この世の人間とは）変わってしまうということです。

（実は）ひと言、言っておかねばならぬことがあるのです。」

と言って、（帝に宛てて）手紙を書く。



中将取りつれば、

ふと天の羽衣^{あま はごろも}うち着せたてまつりつれば、

翁^{おきな}を、「いとほし、かなし。」

とおぼしつることも失^うせぬ。

この衣着^{きぬ}つる人は物思ひなくなり^きにければ、

車に乗りて、百人ばかり天人具^{てんにん}して、昇^{のぼ}りぬ。

そののち、翁・姫^{おうな}、

血の涙なみだを流ながして惑まどへど、かひなし。

中将が（手紙と壺を）受け取ると、

（天人が）さつと天の羽衣を（かぐや姫に）着せてさしあげたので、

おじいさんのことを、「気の毒だ、かわいそうだ。」

とお思いになつていたことも消え失せてしまった。

この天の羽衣を着た人は、地上の人間としての感情がなくなつてしまったので、

（そのまま）天を飛ぶ車に乗つて、百人ほどの天人を引き連れて、（月の世界に）昇つてしまった。

そののち、おじいさんとおばあさんは、

血の涙を流して悲しむけれども、どうにもしかたがない。

出典『新編日本古典文学全集12

竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』

二年

枕草子

清少納言せいしょうなごん

うつくしきもの 瓜うりにかきたるちこの顔。すずめの子

の、ねず鳴きするに躍をどり来る。二つ三つばかりなるちこ

の、急ぎてはひ来る道に、いと小さきちりのありける

を、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとら

へて、大人ごとに見せたる、いとうつくし。

頭かしらは尼あまそぎなるちこの、目に髪かみの覆おほへるを、かきはや

らで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。

（第四百五段）

かわいらしいもの 瓜に描いてある幼児の顔。すずめの子が、ねずみの鳴きま

ねをすると躍るようにして来る（姿）。二歳か三歳ぐらいの幼児が、急いではつ

て来る道に、とても小さなごみがあつたのを、目ざとく見つけて、とてもかわい

げな指につまんで、大人一人一人に見せているのは、とてもかわいらしい。

髪をおかっぱにしている幼児が、目に髪がかぶさっているのを、払いのけもし

ないで、首をかしげて何かを見ているのも、かわいらしい。



五月さつきばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も

水も、いと青く見えわたりたるに、上うへはつれなくて、草

生ひしげりたるを、ながながと、たたざまに行けば、下

はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたる、いとをかし。
(第二百七段)

五月頃などに山里に出かけるのは、とてもおもしろい。草の葉も水も、一面に真っ青に見えているのに、表面はなにこともない様子で、草が生い茂っているところを、延々と、まっすぐに行くと、下にはなんともいえないほどの(美しい)水が、深くはないけれど、人が歩くのにつれて、飛び散る様子は、とてもおもしろい。

出典『新編日本古典文学全集18 枕草子』

徒然草
つれづれぐさ

兼好法師
けんこうほうし

仁和寺にんなじにある法師、年寄るまで、石清水いしみづを拝まざりけ

れば、心うく覚えて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、

かちより、詣まうでけり。極楽寺ごくらくじ・高良かうらなどを拝みて、かば

かりと心得て帰りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、なにごとかありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意ほんいなれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達せんだちはあらまほしきことなり。

(第五十二段)

仁和寺にいる僧が、年をとるまで、石清水八幡宮を参拝したことがなかったの
で、残念に思つて、あるとき、思い立って、たった一人、徒歩で、お参りした。
極楽寺や高良神社などを拝んで、これだけだと思ひこんで帰ってしまった。

さて、仲間に向つて、「長年、思つていたことを、果たしました。聞いていた
のにもまさつて、まことに尊くいらつしました。それにしても、参拝してい
るどの人も山へ登つたのは、何があつたのだろうか。知リたかつたけれど、八幡
宮をお参りすることこそが目的であると思つて、山までは見ませんでした。」と
言つた。

ちよつとしたことにも、その道の指導者はあつてほしいものである。



ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて、

的に向かふ。師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つこ

となかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あ

り。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と

言ふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと

思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師こ

れを知る。この戒め、万事にわたるべし。

(第九十二段)

ある人が、弓を射ることを習うのに、二本の矢を手にとって、的に向かった。

先生が言うことには、「初心者は、二本の矢を持つてはならない。二本めの矢をあてにして、一本めの矢をいかげんにしてしまう心があるからである。そのたびごとに、ただ、当たるか当たらないかを考えず、この一本の矢で決着をつけようと思え。」と言う。たった二本の矢（を射るの）に、先生の前で、その一本をいかげんに射ようと思うだろうか。怠け心というものは、自分では気づいていなくても、先生にはわかつているものだ。この教えは、万事にあてはまるはずで

ある。

漢詩

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る

李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し

煙花三月揚州に下る

孤帆の遠影碧空に尽き

惟だ見る長江の天際に流るるを

故人西辞黄鶴楼

煙花三月下揚州

孤帆遠影碧空尽

出典『新編日本古典文学全集44 方丈記

徒然草 正法眼藏隨聞記 歎異抄』

惟見長江天際流

出典『新書漢文大系6 唐詩選（新版）』

春望^{しゅんばう}

杜甫^{とほ}

国破れて山河在^{さんか}り

城春にして草木深^{さうもく}し

時に感じては花にも涙を濺^{なみだ}ぎ

別れを恨^{うら}んでは鳥にも心を驚^{おどろ}かす

烽火三月に連なり^{ほうくわさんげつ}

家書万金に抵^{あた}る^{ばんきん}

白頭搔^かけば更に短^{みづか}く

渾^すべて簪^{しん}に勝^たへざらんと欲^{ほつ}す

国破山河在

城春草木深

感時花濺淚

恨別鳥驚心

烽火連三月

家書抵萬金

白頭搔更短

渾欲不勝簪

絶句^{ぜつく}

杜甫^{とほ}

江碧にして鳥逾白^{かうみどり}

山青くして花然えんと欲^{あを}す^{ほつ}

出典『漢詩選9 杜甫』

今春看又過ぐ
こんしゅんみすみすまた

何れの日か是れ帰年ならん
いづ

江碧鳥逾白

山青花欲然

今春看又過

何日是帰年

出典『新書漢文大系6 唐詩選（新版）』

三年

おくのほそ道

月日は
つきひ

松尾芭蕉
まつお ばしやう

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。
舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふ

る者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に

死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれ

て、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、

江上の破屋にくもの古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立

てるかすみの空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物に

つきて心を狂はせ、道祖神の招きに会ひて、取るもの手

につかず。もも引きの破れをつづり、笠の緒付け替へ

て、三里に灸据ゆるより、松島の月まづ心にかかりて、

住めるかたは人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸け置く。

月日は永遠の旅人のようなものであつて、来ては去り、去つては来る年もまた旅人である。（船頭として）舟の上で働いて一生を送り、（馬方として）馬のくつわを引いて年をとつていく人々は、毎日が旅であり、旅を住まいとしている。昔

の人の中にも、多く、旅の途中でなくなった人がいる。私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に誘われていくように、さすらいの思いがやまず、（近年は）海浜の道をさまよい歩き、去年の秋、（隅田）川のほとりの粗末な家屋に（帰って、）やがて年も暮れ、春がすみの立ちこめる空のもとで、白河の関を越えたいと、そぞろ神が乗り移って心をそわそわさせ、道祖神が手招きをしているような気がして、取るものも手につかない。もも引きの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据えようと、松島の月はどんなだろうかとまず気にかかつて、今まで住んでいた家は人に譲り、杉風の別荘に移るにあたつて、（この句を発句とした）面八句を（記念として）庵の柱にかけておいた。

平泉

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、蝦夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城

にこもり、功名一時の草むらとなる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆるしらがかな

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、薨を覆ひて風雨をしのぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

出典『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集2』

中国の古典の言葉

備へ有れば、患ひ無し。

有備、無患。

(ふだんから)準備ができていれば、(万一のことが起こっても)心配することはない。

出典『新釈漢文大系 26 書経(下)』

百聞は一見に如かず。

百聞不如一見。

人から百回聞くことも、自分の目で一度見て実際に確かめることには及ばない。

出典『漢書 第九冊』

虎穴に入らずんば、虎子を得ず。

不入虎穴、不得虎子。

虎のすむ穴に入らなければ、虎の子を得られない。利益を得るには、危険も冒さなければならぬ、ということのたとえ。

出典『後漢書 第6冊 列伝四』

寧ろ鶏口と為るとも、牛後と為る無かれ。

寧為鶏口、無為牛後。

鶏の口になっても、牛の尻になつてはならない。大きな集団の後方より、小集団の先頭のほうがよい、ということのたとえ。

出典『新釈漢文大系 20 十八史略(上)』

先んずれば即ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る。

先即制人、後則為人所制。

人より先に行動を起こせば有利な立場に立つことができ、出遅れると人に負けてしまうことになる。

出典『新釈漢文大系 39 史記(二)』

子曰はく、「学びて時にこれを習ふ、また説ばしからずや。朋遠方より来たるあり、また楽しからずや。人知らずして慍みず、また君子ならずや。」と。

子曰、「学而時習之、不亦說乎。
有朋自遠方來、不亦樂乎。

人不知而不慍、不亦君子乎。」（『論語』）

先生が言われたことには、「学んだことをおりにふれて反復し理解を深めていくのは、なんともうれしいことではないか。友人が遠くから訪ねて来るのは、なんとも心楽しいことではないか。他人が自分を認めてくれなくても不満をもたない人は、なんとも立派な人ではないか。」と。

出典 『新釈漢文大系1 論語』

和歌

春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山 1 2 3 4 5
持統天皇

紀貫之

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける 1 2 3 4 5

在原業平

世の中に絶えて□のなかりせば春の心はのどけからまし

俳句

行く春や鳥啼き魚の目はなみだ

松尾芭蕉

春の海ひねもすのたりのたりかな

与謝蕪村

めでたさもちう位なりおらが春

小林一茶

若鮎の二手になりて上りけり

正岡子規

問1 和歌「春過ぎて」(持統天皇)と、和歌「人はいさ」(紀貫之)について、意味の切れ目としてもっともよい箇所を選び、それぞ

れ番号で答えなさい。

和歌「春過ぎて…」 ()

和歌「人はいさ…」 ()

問2 和歌「世の中に…」(在原業平)について、□にあてはまる言

葉として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 梅 2 桜 3 椿 4 朝顔

問3 俳句「春の海」(与謝蕪村)について、線「ひねもす」の

意味として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 おだやか 2 満ち潮 3 ゆっくり 4 一日中

問4 俳句「めでたさも」(小林一茶)について、線「ちう」の

読みを、現代仮名遣いを用いてすべてひらがなで書きなさい。

()

問5 俳句「若鮎の」(正岡子規)の季節について答えなさい。

()

□はあけぼの。

A やうやう白くなりゆく山ぎは、

B 少しあかりで、

紫だちたる雲の細くたなびきたる。
むらさき C

つれづれなるままに、

日暮らし、□に向かひて、

D 心にうつりゆく、よしなしごとを、

E そこはかとなく 書きつくれば、

あやうこそ、ものぐるほしけれ。

(清少納言『枕草子』より)

(兼好法師『徒然草』より)

問6 随筆「枕草子」について、□に入る季節として、もっともよいものを漢字で書きなさい。()

問7 線Aの部分の読みを、現代仮名遣いを用いて、すべてひらがなで書きなさい。()

問8 線Bの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。
1 光りを増して 2 赤くなって 3 風が吹いて

問9 線Cの部分の後に補う言葉(現代語)として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。
1 〴〵のがふさわしい 2 〴〵のは趣がある
3 〴〵のは殺風景だ 4 〴〵のがみつともない

問10 随筆「徒然草」について、□に入る言葉として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。
1 硯(すずり) 2 墨(すみ) 3 筆 4 紙

問11 線Dの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。
1 たわいもないこと 2 良いことと悪いこと
3 出来の悪い仕事 4 記憶に残っていること

問12 線Eの部分の読みを、現代仮名遣いを用いて、すべてひらがなで書きなさい。()

物語

A 祇園精舎の鐘かねの聲、諸行無常しよぎやうむじやうの響ひびきあり。

娑羅双樹しやらさうじゆの①の色、盛者必衰じやうしやひつすいのことわりをあらはす。

C おごれる人も久しからず、ただ春の夜よの夢のごとし。

たけき者もつひには滅ほろびぬ、ひとへに風の前の塵ちりに同じ。

(『平家物語』より)

漢詩

春曉しゆんげう
孟浩然もうこうねん

春眠しゆんみん 曉あかつきを覚えず

処処しよしよ 啼鳥ていてうを聞く

夜来やらい ②の聲

E 花落つること知る多少

問1 線Aの部分の読みを、現代仮名遣いを用いてすべてひらがなで書きなさい。

()

問2 ①に入る言葉として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 土 2 草 3 木 4 花

問3 線Bの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び番号で答えなさい。

- 1 断ること 2 そうあるべきこと(道理)
3 約束したこと

問4 線Cの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び番号で答えなさい。

- 1 長くは続かない 2 長い間会っていない
3 永遠に続いていく 4 しばらくやっていない

問5 線Dの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び番号で答えなさい。

- 1 体の小さな鳥 2 鳥のさえずり
3 強い風が吹く音 4 鳥の鳴き声のような音

漢文

吾^{われ}、十有五^{じゅうご}にして学^{がく}に志す。

三十^{さんじゅう}にして ③

四十^{しじゅう}にして ④

五十^{ごじゅう}にして ⑤

六十^{ごじゅう}にして ⑥

七十^{しちじゅう}にして ⑦ の欲^{ほつ}するところに従^{したが}ひて、矩^{のり}をこえず。

(『論語』より)

問6 ②に入る言葉として、もっともよいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 人々 2 風雨 3 草木 4 雷鳴

問7 線Eの部分の意味として、もっともよいものを次の中から選び番号で答えなさい。

- 1 花がたくさん落ちたことを知った
2 花が落ちたかどうかわからない
3 花はどれほど散ったことだろう
4 花は多少落ちたかもしれない

問8 ③ ⑥にあてはまる言葉を、それぞれ次の中から選んで記号で答えなさい。

- ⑤ () ③ ()
⑥ () ④ ()

ア	耳 ^{した} 順 ^が ふ	イ	立つ
ウ	天命を知る	エ	惑はず

問9 ⑦にあてはまる言葉を、漢字一字で書きなさい。

小学校で扱う古典教材

現行版教科書

() 内の数字は掲載発行者の数。
*印は、「発展」・「付録」等の扱い。

学年	文学・絵巻など	短歌・俳句	漢詩・漢文・故事成語	伝統芸能	知識
小3				・落語(1)「じゅげむ」	
小4		・俳句(1) 松尾芭蕉・小林一茶 他		・落語(1)「そろそろ」・「寿限無」 ・狂言(1)「清水」	
小5	・「竹取物語」(2)*	・短歌(1) 与謝野晶子・柿本人麻呂・良寛・正岡子規 他 ・俳句(2) 小林一茶・松尾芭蕉・高浜虚子 他 ・百人一首(1)	・故事成語(1) 五十歩百歩・蛇足・矛盾 他	・落語(1)「まんじゅうこわい」	・ことわざ(2)「石の上にも三年」他 ・いろはうた(1)
小6	・「竹取物語」(1)* ・「枕草子」(1)* ・「平家物語」(2)*	・短歌(4) 橘曙覧・斎藤茂吉 他 ・俳句(4) 松尾芭蕉・与謝蕪村 他 ・百人一首(1)	・「論語」(1)* ・孟浩然「春曉」(1)* ・蘇軾「春夜」(1)*	・落語(1)「崇徳院」 ・狂言(1)「柿山伏」 ・文楽(1)*	・万葉仮名(4) ・ことわざ(3)「さるも木から落ちる」他

平成 23 年度版教科書

学年	文学・絵巻など	短歌・俳句	漢詩・漢文・故事成語	伝統芸能	知識
小3	・「竹取物語」(1) ・笑い話「星取り」(1) ・鳥獣人物戯画(2) ・鼠の草子(1)	・短歌(2) ・俳句(5) 松尾芭蕉・良寛・与謝蕪村・小林一茶・正岡子規 他 ・百人一首(2)		・落語(1) 「じゅげむ」	・季語(1) ・八節(1) ・いろは歌(2)
小4	・昔話「浦島太郎」(1)	・短歌(3) 柿ノ本人麻呂 他 ・俳句(1) 松尾芭蕉・正岡子規 他 ・百人一首(4)	・故事成語(4) 蛇足・五十歩百歩・漁夫の利	・落語(1) 「額に柿の木」 ・落語(2) 「じゅげむ」	・ことわざ(2) 「石の上にも三年」ほか ・月の名前・暦(睦月・如月ほか)(1)
小5	・「竹取物語」(3) ・「枕草子」(2) ・「徒然草」(2) ・「平家物語」(4) ・「宇治拾遺物語」(1)	・短歌(2) 式子内親王・良寛 他 ・俳句(3) 茨木和生・渡辺水巴・中村汀女・松尾芭蕉 他 ・百人一首(1)	・故事成語(1) 「登竜門」「他山の石」他 ・「論語」(2) ・漢詩(2) 孟浩然「春曉」・李白「静夜思」・蘇軾「春夜」・杜甫「絶句」他	・落語(2) 「風がふいたら箱屋がもうかる」・「まんじゅうこわい」他 ・狂言(2) 「附子」・「しびり」他	・季語・俳号(1)
小6	・「竹取物語」(1) ・「枕草子」(3) ・「徒然草」(2) ・「平家物語」(1) ・「おくのほそ道」(2) ・福沢諭吉「天地の文」(1) ・名言(1) ・聖徳太子 他	・短歌(4) 与謝野晶子・橘曙覧 他 ・俳句(1) 正岡子規・山部赤人 他 ・万葉集(1)	・「論語」(2) ・漢文(1) 「百聞不如一見」他 ・漢詩(3) 孟浩然「春曉」・高啓「尋胡隱君」・李白「静夜思」他	・落語(1) 「寿限無」 ・狂言(1) 「柿山伏」・「神鳴」他 ・歌舞伎・文楽(1)	・万葉仮名(3) ・暦(1)

『ことばの学び 臨時増刊号 vol.1』(三省堂)より

小中の接続を見通した「古典」授業

国語教育実践研究会 編

2011 年 4 月 5 日 初版発行

発行者 株式会社 三省堂 代表者 北口克彦

印刷所 株式会社 双文社印刷

発行所 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話 03-3230-9411（編集）・9551（営業）

小中の接続を見通した「古典」授業

